福嶋・小森対談

「蓮如の評価を巡って」

福嶋先生と小森部会長との対談は一九九七年十月二十六日、部落解放県政樹立第二十八回広島県民研究集会の「解放の思想と宗教」の分科会で行われたものである。なお福島先生と小森部会長との対談は「人権への対峙とその歴史性」をめぐって一年前に行われており、それを受けて今回の対談が企画されている。

（人権を成立させる土壌と宗教）

司会　昨年の討論をうけて「宗教と人権」という点でまず福嶋先生より提起いただければと思います。

福嶋　府中の集会からもう一年が経ちました。あの時もいろんな事を申し上げたように記憶しておりますが、そのことをあまり前提にしないで、はじめに人権の成立基盤といったことから申し上げておきたいと思います。

最近お気付きになっている方も多いのではないかと思いますがガーデニングとかいった園芸が流行になっているらしいのですが、その園芸の話です。私、そのブームとはかかわりないのですが、ギガンジュウムという、紫色のネギぼうずのような花と言えばご存知の方もあろうと思いますがこの花が気に入りまして球根を植えたことがあります。春には見事な花を咲かせようと肥料も日当たりも考えて育てたのですが、全く成功しませんでした。後から知ったのですけども、この花、実は土壌が酸性では全然育たないのです。アルカリ性の土壌でないといくら手をいれても駄目なのです。植物にはそういったことは珍しくないこと、あらためて申し上げるまでもないのですが、私は完全に失敗した次第であります。実は私たちの課題とする人権も、この花が酸性の土壌では育たないように、土壌の問題が大きくかかわっているのではないでしょうか。土壌から改めなけれ

ば、いくら水をやり肥料や日照を考えて育てても、花を見ることができないという、ある種の植物のように、人権も土壌から考えなければ、本当には花を咲かすことはできないのではないかということです。

敗戦から半世紀が経ちましたが、私たちはその間、人権についてずいぶん教えられてまいりました。人権の何たるかにはじまり、その尊厳、確立について知識としてはかなりすすんできたのではないか思いますが、本当に一歩一歩、確かなものにしてきたかと言えばやっぱり非常に寂しい訳であります。

一例として靖国問題を取り上げてみますと、あの靖国神社国家護持法案なるものが最初に国会に提出されたのは三十年も前のことです。ご記憶になっている方もあろうと思いますが、執拗にその成立がもくろまれました。私はこれには神道の信者以外は、一斉に反対が起こって比較的容易につぶせる、そうなって当たり前だというふうに思っていたのですが、そういった動きは全然起きてこなかった。神祇不拝を立場とする真宗門徒といわれる人々も、無宗教を誇り公言している人々も、ほとんど反応しませんでした。反応が鈍かったというのではなく、実態はこの法案に賛成だったということがすごく明らかになってまいりました。真宗教団中枢部も、自らの宗教的立場に立って反対できず、まことに細々と憲法に寄りかかった反対の声はあげましたが、そこには熱意は感じられませんでした。門徒の中には、「本願寺が靖国法案反対と言うようであれば、真宗門徒を離れるぞ」という事を言い出す人さえ出てきて教団指導層は腰砕けになりました。このように、人権の中でも「基本的」とされる「信教の自由」権を自ら放棄して平然としておれるという、まことに大変な事態が当たり前みたいにあるわけです。こうした倒錯した事態を見据えるとき、私たちはどういった条件を充たす事によって本当に人権を問題にし、その確立をはかることができるのか考え込まざるえないわけです。ご承知のように、明

福嶋さん

治維新を出発点として神道国教化政策が始まります。これには真宗門徒の根強い抵抗があって、「神道は宗教にあらず」と言うことにして、実質的に国教にしていった訳です。

日本の近代国家は天皇を中心に据え、これを現人神（あらひとがみ）とします。神聖にして絶対の存在としてこの現人神を受容するよう強制します。現人神を拠点にいただく国家体制、これはほとんど究極の国家主義の体制であります。この近代天皇制国家の精神的基盤が国家神道であったのです。神道を基盤として、その上に成立した神聖にして全体の天皇が君臨する国家体制、それは抑圧と差別、戦争と侵略の体制に外なりませんでした。ここでは人権なんて原理的に問題にならないことは言うまでもありません。

それが五十年前、あの敗戦によって解体されます。国家体制も国家神道も、そしてさまざまなイデオロギー群も否定され、世は民主主義の時代に入った訳です。ここではじめて人権が問題になります。反封建、反国家主義、あるいは近代化、民主化がスローガンとして叫ばれ、確かに大きく変わりました。そして、いまやそれも終わりを告げたとして、いかがわしいポストモダンが唱えられています。こうした大きな変化の背後で、私たちが見落としてならないのは、敗戦前のしかしその精神的基盤としての敗戦後も国家体制の基盤としてあった宗教、神道的なそれがそのまま戦後に生き延びてきたということです。敗戦後の国家権力が踏まえ、私たち国民の側が抱え込んで自覚することもないこの神道的宗教性のゆえに、戦後は一貫して戦前を、そしてポストモダンはいわばプレモダンを実質的なところで引きずらざるを得ないわけです。

神道を国教化する、国家神道が成立するというようなことは実は神道だけの問題ではありません。他の宗教がそれを受け入れることによって国家神道体制は成立し、神権的天皇制の基盤が出来あがります。神道以外の宗教のすべてが、神道を受容し、神道化してしまいます。浄土真宗も例外ではありませんし、のみならず、国家神道体制の中心的存在となります。差別と抑圧の、人権－人権不毛の体制を根底で支える宗教として、きわめて有効であったわけです。それが清算されることなく、敗戦後もそのまま生き延びてきた。真宗に限定して言えば、そうした真宗の変質を表現したのが信仰の未来主義化であり、真俗

二諦論でありました。これを根底から問わず、言い換えれば差別と抑圧の体制を支えた基盤に手をつけずして、人権とか平和とか言ってみても、それを問題にする宗教的根拠は何もないのですから、状況に追随したにすぎないのではないでしょうか。かって天皇制国家への追随が真宗的根拠なしに行われたように、こんどは〝世間通途〟に逆の方向で動こうとしているにすぎないわけです。そうした実践が本当は何も生み出し得ないことは、ことさら言うまでもありません。

ある種の植物が土壌を選ぶように、人権でも土壌の問題を無視できません。私たちはこのことにどれだけ気づいているのでしょうか。ことさら申しあげるまでもなく、人権は平等な尊厳という人間観を不可欠とします。たんなる平等ではない、尊厳における平等です。一世紀前に福沢輪吉は、「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」と、人間の平等なることを紹介しました。彼の果たした役割は過不足なく評価されなければなりませんが、結局のところ福沢の平等は尊厳とは逆の、ちっぽけさ、卑小さにおける平等でありました。彼が近代天皇制下の国家と社会に絶大な貢献をしたというのは、煎ずるところこうした人間観にかかわっていたとしなければならないと考えられます。そして、当面私たちが注目すべきは、福沢の卑小さにおいて平等とする人間観が、当時の真宗の人間観と深くかかわっているということです。今日、これから問題にされるであろう蓮如を福沢は高く評価していたということも、非常に示唆的であるように思います。

蓮如の真宗は、この世で人間の尊厳をもたらす根拠となったのでしょうか。人権の根拠たりうる何かをもっていたのでしょうか。死後の極楽浄土への往生を説きつづけた蓮如の真宗は、人間のエゴイスティックな欲望充足主義の宗教的形態ではなかったと言えるでしょうか。欲望充足主義の宗教が人権の基盤たりえないことは明らかなのですが。

小森　私の方からは解放運動と宗教とどういう関わり合いを持っているかという事について最初に話してみたいと思います。全国水平社が一九二二年に結社して、「吾々に對し穢多及び特殊部落民等の言行によって侮辱の意志を表示したる時は徹底的に糾弾を為す」という事を発表しました。そしてあまり時間を置かずに東西両本願寺に対しまして「あまりええかっこうをいうな」と要求を突き付けています。そ

して今もドキッとする問題は東西両本願寺に対して業の思想について質問をしておるわけです。「仏教では前世の因縁ということ、この世の中や人間のことを説明をするが、では吾々被差別部落民は前世の因縁だから、こういう差別を受けているのか。本願寺の正式な見解を聞かせてほしい」と。これらは現在でも吾々は議論しているんですけれど、前世の因縁ということになったら、極端な事を言うと解放運動はやっても駄目なんです。でも今日までキチンとした回答をいまだにしていない。

それで今度の蓮如没後五百年の大きな節目の年に色々な蓮如にまつわる行事がありますが、どういう気持ちで蓮如の記念行事を進めていくのか。蓮如という人は今のような解放運動からの疑問点、理念というものに対してどういう事を押さえておるのか、というような事を計画してくれなかったら困るではないか、という形で解放運動と蓮如との関係を申し上げてみたいと思います。

小森　部会長

もう一つはですね、解放運動というのも残念ながらどんどん、どんどん破綻していっておるわけで、私はこの数年前まで部落解放同盟中央本部の書記長をしておりました。本部の書記長という事になると、運動方針というのはもともと書記長が執筆をするわけで私が書いてきました。その中で差別者と闘うという事は闘う側の、吾々の側の主体というものが向こうさんと喧嘩しても負けないぐらいのものになっていないといけないということを言ってきました。ちょっと何か言ったら直ぐそれに乗せられてしまうようではいけないと。そういう意味で闘う主体というのをどれだけ強化するか。つまり「主体確立」という事を私は提唱してきました。そして広島県の運動ではこの事を「社会的立場の自覚的認識」と言ってきましたし、中央本部における運動方針では「主体的力量をどう高めるか。真に部落を解放するにたりる主体的力量とは何か」こんな表現をして参りま

した。運動方針に書いてみたわけです。

それで結局、仏教がいう所の業、あるいは宿業というような事になると、私は七五年前に水平社が東西両本願寺に問いつめていることに対して、やっぱり自分なりに業・宿業という問題について考えたわけです。その考えた結果とすれば、業というものは自分の内面、それもあるかないかわからない前世という言葉までだしながら、己の気づかざる世界の自分を巡る問題を深く深く洞察するという事を、吾々に仏教が教えようとしているのではないかということです。そして仏教のいう、自分を問い詰める、自分を問い詰めてゆく事が、「真に部落を解放しうるに足りる主体的力量を培うことになる」のではないか、という意味を込めて私は「業・宿業観の再生」という言葉を使ってきたわけです。

しかし、この数年前から解放運動がドッと横にそれて権力に頭をなでられるという状況が生まれてきました。これは解放運動だけでなく労働運動も政党も武装解除してしまった。でも一番悪いのは権力の言いなりになっていながら、そうではないというふりをすることです。ここの所のネジレが二重になっておるんです。

何とかその橋頭保をこの広島県連が守っていこうと頑張っているわけです。まず解放運動と宗教の関係を提起させてもらいまして蓮如の問題にも入りたいとこう思います。

司会　ではこれからは一つずつ問題に入っていきたいと思う訳でございますけれども、特に何故現代においても宗教界が権力の言いなりになるような事になるかにつきまして、先ほど総論的に福島先生におっしゃっていただいた訳ですけども、もう少し具体的なことがございましたら、お願いしたいと思いますが。

福嶋　私は日本近代の思想史のようなものを選考しておりまして、念頭から去らないことがあります。それは、さまざまにあった日本近代の思想というのは、本当に思想たりえていたかということです。ご存じのように、封建制－幕藩制の崩壊が決定的になったところでペリーがやってまいります。欧米の圧倒的な力の前に開国、そして明治維新となり、欧米文化の積極的な受容が始まります。そして文明開花政策のもと近代思想がどんどん入ってまいります。明六社の活動、そして自由民権運動が急速に広がり、上からの資本主義が強行され、労働運動、ついで社会

主義運動が現れます。こういったつぎつぎと展開される運動を生み出した思想はどんなものであったかといいますと、そこにあったのはそれぞれの思想についての知識です。

ここでも私たちは新しい思想を受け止め育む土壌、あるいは人間観の問題に突きあたります。一見思想としてあるわけですが、少し困難な状況になりますと、いわば紙屑のごとくそれは捨てられます。例えば自由民権思想ですが、自由を柱とする民権－人権は何一つ成立していないのに、もう民権は古いなどと言われはじめます。もともと生きることそのものである思想は、もちろん例外的に見い出せないことはありませんが、総体としては極めて弱いわけです。そういった事態は何に起因するかと考えて行きますと、やはり思想が成立しにくいという私たちの土壌に行き着くように思います。思想がどうあれ、全体像をもって思想として成立しにくいという事は、戦後も一貫するわけですし、現在にまで至ると言わねばならないようです。戦後民主主義を支えたものはどうなったのでしょうか。あるいは戦後思想の中で大きな位置を占め、さまざまな運動の中核となった社会主義－マルクス主義の退潮、あるいは崩壊現象は最近のことであります。

マルクス主義に多少とも関心のあった方ならば、先刻ご承知の上部構造と下部構造ということは、実は上部構造たる思想の領域にも言えることではないでしょうか。私は思想領域の下部構造、あるいは基底をなすのは宗教であると考えていますが、私たちの宗教性は、どなたかが言われたように底なしの沼であって、その上には何も建てられないのではないか。どろどろとした底なしの沼に、一時的に何が繁殖しても、大地に根を張っていませんから嵐が来ればことごとく倒れてしまう。こんな土壌ですから一時的に活況を呈した運動が何ものをも伝統化することなく崩壊していくのは当たり前のことであると言ってしまえばあまりに素っ気ないのかも知れませんが。私たちは本当に大地に根を張った運動をつくり上げなければならないと思います。その意味で、部落差別－解放、あるいは人権の視点から、ほとんど取り上げることのない真宗を全体として問題にし、蓮如を問うことは通常考えられているよりもはるかに重要な意味をもつと思います。

小森　私たち日本の封建社会から明治維新にかけての自

由民権運動をとっても大正デモクラシーをとっても、また部落解放運動で言うと最近の解放運動をとってみても、思想が非常に簡単にぐらついてきておるという事はお互いに認める事だろうと思うんです。それでその思想がぐらつくという事はですね、例えば今日で申しますと、日本の経済の構造というものが、まぁ言ったら二重構造、もっと正確に言ったら多重構造ですけどね。要するに親会社があって、建設業でしたら元請けがあります。元請け、下請け、孫請け、ひ孫請け、ひひ孫請けみたいな感じになっておりましてね。例えば広島でアジア大会の前に作っていたアストラムラインの橋げた落下事故がありましたが、あの工事をしておったのは孫請け、ひ孫請けでしたね。それは工事の安全という事を考えることが出来なくなるというぐらいにまで絞りに絞られて仕事をしておったわけで、こういうような現代の構造というものがですね、そのまま人間の意識を反映させまして「上みて暮らすな、下見て暮らせ」という意識を新たにつくっている。部落差別を支えてきた差別思想というもの、解決しないでなるべくそのまま温存しておこうというのがだいたい今も支配階級の考えている事であります。

先ほど福嶋先生がおっしゃったように欧米の思想として入ってきた事は知識としても、さすがに「差別がよろしい」という事は口にしないけれども、「よろしい」と言わずに差別というのはほっとけば温存されるわけですから。そういう形で今日の支配階級は政策を進めておる。それが今言われる九六年の「地対協意見具申」そして「一般対策への円滑な移行」でありますね。

そういう事でありますから、福島先生の言われる土壌の部分を私は今の経済の構造という所に見るわけです。その物質的な基礎の所をですね突き崩さないとだめだとこう見ています。しかし、その全体を突き崩すと言ってもですね、突き崩すための準備というものが残念ながら非常にグラついている。この思想の面について土壌の部分を木っ端みじんに崩すだけの条件を整えなければならないんで、そこにお互いの個々の思想分野における運動の進化というか深まりというものが大事になってくる、こういうふうに思っているんです。

何か本願寺が連続差別事件に対する最終的な総括書みたいなものを出しておりまして、解放同盟中央本部をごまかしておりますが、吾々は解放運動の立

場に立ってですね、本山のごまかしや、曖昧な思想というものを整理して行かなければならないとこう思っております。しかし本山のそういう考え方は蓮如以来のいわゆる封建教団と深く関わっておるとわたしは思っているんです。したがって蓮如の思想はどうだったか、蓮如を今無条件で誉めそやしているがそれでいいのかという所にだんだん迫ってきているという事です。

（蓮如の評価を巡って、そして小森の「業・宿業提起」について。）

福嶋　何をどういったらいいのか、いささかかみ合わないことを承知でこういうことを申し上げてみたいと思います。封建制の矛盾が覆いがたくなる近世後半期になると、百姓一揆が頻発するようになります。この百姓一揆は反封建闘争などと呼ばれておりますが、実際は一揆を起こした人々が封建制打倒をめざしたものではありません。そこでは封建制はほとんど自明の前提としたものであったわけで、その上で悪代官の履免を要求し、あるいは藩専売制や年貢の増徴に反対したものです。封建身分制の不当をかかげた闘争でもありません。封建制はまるで清算勘定に入っていない。封建制の矛盾が大きくなって、いかんともしがたい段階に入っても、新たな社会・国家構想は出てまいりません。そもそもそれを生み出す普遍的な人間観を欠いていたのですから。封建権力が崩壊に瀕してきてもそれを超えるものは出てこようがないわけです。

そしてそれが覆いがたくなった現実の体制をトータルに批判するには宗教が大きな役割を果たしてきた歴史があります。近代社会の成立期には封建体制を批判し否定するには宗教的形態をとる必然性があったとまで言われています。

あらゆる面で条件が異なりますが、ヨーロッパの封建制崩壊期に起こった農民の反乱としてジャックリーの乱とかワットタイラーの乱は有名ですが、そこで指導的役割を担ったのが僧侶であったということは注目したいと思います。「アダムが耕し、イブが紡いでいたとき、どこに封建領主がいたか」と民衆に呼びかけます。抑圧と隷従は神の意志に反していることを説いたわけです。こういったことを念頭に置きながら、民衆の宗教として浸透した真宗を考えてみたいと思います。

なるほど真宗は貴賤上下の別なく信心によって平

等に救われることを説いたのですが、その教説は民衆に何をもたらしたのでしょうか。救いは死後のこと、信心によって死後、究極の安楽たる極楽に生まれることに尽きます。過酷な支配への忍従は説いても、その不当を問うことは決してなかったわけです。人間としての尊厳を自覚せしめる契機、あるいは根拠としてその信仰は働いたのでしょうか。私たちはまったくそうではなかったと言わざるをえないでしょう。

真宗がこうしたものになるには、それなりの歴史があり、宗教的変質があるわけです。蓮如の果たした役割は見逃せないと思います。戦国の乱世に活躍した蓮如によって本願寺は巨大教団になりますが、彼の説いた信仰は、この世とかかわることがありません。にもかかわらず、「世間通途」に生きることを要求します。必要とあらば「王法為本、仁義為先」でなければならないといいます。お浄土行きの信心さえあればいいわけで、この世のことはどうでもいいわけです。差別と抑圧を当然とするこの世のありように従って生きていけばよいのだというのが「世間通途」であります。都合次第では「王法為本」でいいわけです。五十年百年のこの世はまことに儚いもの、何の価値も認められないようであります。あれほど強調された信心は、この世を生きるに何の原理も生み出さないのです。信仰－信心とは完全に浄土行きのキップ。この世にあって唯一意味ありとされるのがこのキップを入手することでありました。これを手に入れたら、獲得したら、求められるのは報恩の称名です。信心に基ずく新たな原理の成立ということは、蓮如と無縁であること、ことさら申し上げる必要もないでしょう。

蓮如のすすめる浄土は実体的な世界であったようです。前世があって、この世があって、そして来世がある、そこで業とか宿業とか宿善とか説かれ、この世のすべてはそれで説明され、合理化されるというわけです。例えば江戸時代の「士農工商エタ非人」という封建身分制度も前世の業ということで合理化されるのですから、真宗信仰がきわめて有効な支配のためのイデオロギーとなっていたことは否定できません。事態は近代天皇制下でも全く同じでした。そういうことですから、私たちはこれでも仏教なのか、真宗とは差別と抑圧を正当化しそれに従属する人間を作り出すものなのかという問いを突きつけなければなりません。正しくはこうじゃないのかと

いった具合に答えを準備したのでは差別と従属の論理として構造化した仏教－真宗の延命に手を貸すことになるのではないかと思います。

小森　一、二度福嶋先生とお会いしただけでは殆ど考え方が同じように今まで思っていました。でもこうやって突き詰めた話に入ってみますとだいぶ違っているということが解ってきました。やっぱり思想の所に思想の全体性というところに根本の所を見ておられるという事を感じました。私はそういう思想がいかなる国民社会の発展状況の曖昧さから出てきておるかという所についてしばらく触れたいと思っています。

私は蓮如の教えに封建教学の一番先ぐらいを見ているんです。日本の中世封建社会が断末魔の状況になってきて、修繕に修繕を重ねてもどうにもならないという段階でですね、蓮如の思想は揺れていった。親鸞とは大分違ってきた、こういう私は見方をするのであります。私もちょっと書かせてもらおうと思っていますが、蓮如の思想の最終的な結末は、今の思想対思想の問題だけでずっとやっていくと水掛け論みたいになるだろうと。蓮如が言うことに理屈を付けて、蓮如の立場の正統性を言い続けるだろうと思います。蓮如が何故間違った立場を取らざるを得なかったかという所を、当時の社会経済構造という所から明らかにしないと進まないのではないか。こういうふうに思っています。それから業・宿業の問題ですが、東西本願寺はいまだに十分な回答をしていないわけです。そんな中で連続差別事件が起こっているというのが東西本願寺の現状なんです。

私は専門家でないのでよくはわかりませんが、業の思想は二千年以上も続いているわけです。それは色々あったにしてもそこには人々の心に食い込むものがあるわけで、それを全面否定するだけではダメなんで、今日・明日の議論を常にしている解放運動にとっても、主体の確立ということにおいて大切なことなんです。

福嶋　私の言いたかったことは、小森さんのような方が「業・宿業というのはこういうことだ」というような事をおっしゃると、教団の側はそう理解しなおせば、そう表現すればすむのかとホッとするわけです。本当は、業とか宿業とかが差別の論理として使われているということは、そういった業・宿業理解をしている宗教の全体が問題であるはずでして、そのことを見逃してしまうのではないかと危惧するわけで

す。つまり部分を修正することによって全体の延命がはかられているのではないかと。差別温存の根拠というか土壌というかそういったものの再生産をそれと自覚することもなく続けている側に塩を送る必要はないと思います。

小森　今、福嶋先生が話されたような事については、私の京都の知人がやはり、「君があんな『業・宿業観の再生』というような事をいうのは間違いだ。うっかりしておる」と言って、かなり真剣に忠告をしてくれました。それでもね、運動家である私は、確かにそういう面があるかもしれないが、もっと大事な事をしておるという自覚があるんです。つまりですね、仏教の教えとか真宗の教えを直ちに全面的に直せればいうことはないんですけれど、力関係が変わるまではそうはいかないでしょう。それでも力関係を変えるためには部分を崩していきながら前に進むしかないわけです。急激な変化をしようと思うとですね、革命を起こさないといけない。しかしそれではあまりに犠牲も大きいし現在生きている者があまり犠牲を被らずに、戦意喪失もせずに変えてゆくということになると、部分的に取り組んで最終地点に到達するという順序を追わざるをえないわけです。それはまた個々の大衆運動がそれぞれ双方に刺激しあいながらだんだんだんだん最終的な運動として高まってくる。こういうコースを辿らざるを得ないので、業・宿業はけしらかんじゃないか、と言っただけではいけないんで、何か差別する側の土俵に乗ったようにみせながら前に進むということでしょうか。まあ私の言うのは欺瞞と真実との間ぐらいだろうと思いますけどね。業はこういう考え方ですよと言うと、ホッと安心するかもしれないが、それ以上悪い事をよう言わないということにもなる訳です。

だから、私は蓮如の問題についてもですね、これも嘘と本当の間ぐらいになると思うんですけど、やっぱり蓮如様々と思う人に、蓮如さんのことを始めから全面否定すると聞く耳を持たない。一パーセントでも共鳴する事があればそれを誉めて、マイナスの部分は後から直していこうという方法が、浸透するということでは一番良いのではないかと私は思うわけです。それで何とかして蓮如の良い所を誉める方法がないかなと思うんですが、どれを考えても見つからないですけどね。見つからないですけど、蓮如に対して私はどういう事を思っているかと言っ

たら、「あの人苦労しちゃったんだな」と思うわけです。つまり民衆の側にどう伝えようかということで非常に揺れているわけですよ。こういう揺れというぐらいの所で相手の気を引いて、最終的なところは蓮如さんはこういうところがズレちゃったんじゃあないかという所に到達したいと思うわけです。

司会　ではこれからは本格的に蓮如の宗教思想という面に入っていきたいと思います。現代の浄土真宗の教団においては、教えも仕組みも「確かに蓮如教団である」という事を教団自身が主張するような状況でございます。蓮如さんの所まで溯って行って、例えば先ほど問題がありました業の問題が水平社以来問い掛けられているんだけどもなぜ答えられないという状況を生んでしまったのかという事を考えていきたいと思います。

福嶋　かつて私は教団の出版物で、真宗の歴史とは、親鸞から逸脱、変質の歴史ではないかと言ってあまりにあからさまであるから多少表現をやわらげるように求められたことがありますが。教団の指導層はこのことにどれだけ自覚的なのでしょうか。私のわずかばかりの経験から言えば、教団運営にたずさわる宗政家よりも教学者の方が無自覚的であるようです。いわば変容し変質してしまったところで作りあげられた正統安心を振りかざして、自己の無謬性を信じて疑わないのですからもうどうしようもない気がいたします。自らを相対化する視点がかけらもないと言って、強い反発を受けたことも思い出されます。

それはともかく、親鸞の真宗は大きく質的に変容していきます。その端緒を唯円の『歎異抄』に見ることができると思いますが、それはここでは取り上げないでおきます。私たちがまず注目すべきは、いわゆる「三代伝持の血脈」を主張して親鸞の墓―大谷廟堂の寺院化をはかり、のちの本願寺の出発点とした覚如、その子の在覚であります。そしてそれを継承して決定的にしたのが蓮如ということになりましょう。蓮如によって本願寺は飛躍的に大きくなりますが、教団史の上で他の追随を許さない彼の貢献は、蓮如の立場をその後の教団の立場として不動のものたらしめたと言っていいと思います。蓮如が理解し、親鸞の正義として打ち出した真宗は、江戸時代に入って教団教学―宗学によって訓詁学的に裏付けされ、幕末から明治に入ろうとするところで変質の最後の仕上げがなされることになります。「真俗二諦」―天皇制イデオロギーとしての教学がそれで

あります。

これまでの真宗の変容とか変質といった中身は何かといいますと、人間の平等な尊厳、自立と連帯の根拠であった真宗信仰が、それを全く逆の、差別と従属を支えるものへと変わっていったということなんです。こうした変質は宗教的には真宗の神道化ということになりますが、このことは日本の体制的宗教の原基が神道的なものであることを示しているわけです。一見教えらしい教えもなく、政治的なことは無縁に思われる神道、あるいは神道化した仏教の発揮する政治性に、私たちはキチンと目を向けなければならないのではないでしょうか。

さて、蓮如の真宗ですが、これは歴史的に言えば、真宗変質の蓮如的段階とはいかなるものであったかということになりましょう。それは一言で言えば、無常感を前提とした来世主義化ということになるのでしょうか。お葬式やお通夜で必ず読まれる「白骨の御文章」はいくどとなくお聞きでしょうが、無常を強調することで貫かれています。「朝には紅顔ありて夕べには白骨となれる身」が私たちであり、すべての人間の避けられない事実であると言います。それはその通りであるわけですが、だからどうなんだと言えば、「御生の一大事に心をかけよ」となるのです。ここには大きな断絶、論理の飛躍があることは明らかです。限りある命いつ死んでもおかしくないのがお互いなのだから、エゴイスティックになるのはやめなければならないと言われてもいいわけです。ところがごくあたり前のように死後の浄土往生が説かれ、大変多くの人々がそれを受け入れていった。あの時代、死後は切実な問題であったことがわかります。死んだら安楽な世界に生まれたいというのが広範な人々の必死の思いであったわけで、蓮如はこれに応え、信心というキップを提供したと言えましょう。蓮如の真宗は後生、死後の浄土往生を実現させようとするものに外ならず、「信心正因、称名報恩」はその端的な表現です。人は信心によってのみ浄土に生まれることができるのであって称名によるのではない。称名は浄土往生を約束してくれる阿弥陀仏の報恩なのだというこの「信心正因、称名報恩」を核心とする蓮如の真宗を浄土行きのキップというのはまさに正鵠を射ていると思います。ともかくこうした信仰はこの世の現実のことを問う根拠たりえず、すべてを受容することになります。さきにも申しましたように、「世間通途」の生き方が

提示され、必要とあらば蓮如が判断すれば「王法為本、仁義為先」が念仏者の不可欠の条件とされます。しかし、言うまでもなく浄土行きの信心と「世間通途」、あるいは「王法為本」とは、本当は内的にはかかわりがないんです。差別が支配し人間の尊厳が踏みにじられていても、この信心は何もかかわり得ない。

親鸞において信心とは何であったかといえば、仏心に外なりません。信心を獲るとは仏心を獲ること、ですから「真実信心の人は諸仏にひとしい」といわれるわけです。信心－仏心は一切衆生に平等に与えられている。それをそうと自覚すること、その自覚において生きるという、新たな人間が成立することになります。すべての人の平等な尊厳がそこにある。これにたいして蓮如はどうか、彼の信心はこの世を拓く根拠たりえず、いわばその時代の社会通念にしたがって生きる道しか出てまいりません。封建体制下で、近代天皇制下で、ファシズム下で私たち真宗門徒がどう生きてきたかを考えれば、まぎれもなく蓮如流真宗であったことを認めざるをえないのではないでしょうか。そこには、こんなにも異なっているにもかかわらず、蓮如流真宗をもって親鸞の真宗とする〝学問〟があり、また教団中枢から繰り出される指導－布教があったのです。こう見て来ると、私たちは蓮如の真宗を親鸞の真宗と同じとすることの犯罪性を思わずにはおれません。それがまた今度の法要で声高に強調されるのですから、何ともやりきれなくなるのです。

親鸞のまっとうな継承者として蓮如がいたとは到底言えません。蓮如流に親鸞を理解しておいて、両者は一貫するというまやかしがまかり通っているわけです。蓮如を手放しで讃仰する人々は、親鸞と蓮如では時代が違うといい、それを振りかざせば問題はすべて解決すると考えているかのようです。中には、蓮如当時の仏教がストレートに支配のイデオロギー化していたことを示し、蓮如の真宗は決してそんなものではないという人もいます。確かにその通りなのですが、このことは蓮如はまだましだと言っているに過ぎないと思います。蓮如をさまざまの理由を付けて救い出すことにどれだけの意味があるのか、私たちは考えなければなりません。

小森　世間通途という事について言えば、世間が言うような、あるいは世間が思っているような事に順じていけば良いではないかという事でも、それはそうで

あろうと言える所と言えない所がありますわね。簡単に言うと一般に言う「郷に入れば郷に従え」というぐらいの程度で使われる世間通途であるなら、さほどのこともないわけです。しかし蓮如の場合はですね、「守護地頭を粗略にすべからず」とか「守護地頭を軽んずべからず」ということを世間通途ということで言うわけです。実際歴史の進歩ということから言えば、守護や地頭を粗略にしたり軽んじたりする状況でないとダメなわけです。蓮如はその反対に、守護や地頭に年貢をキチンと収めなさいといっていたわけで、そこらへんに焦点をおいて世間通途と言われておったと思うわけです。私はこれは納得できない、そういう感じです。

ちょうどあの頃はですね、いわゆる年貢をどう言いますか、かつての荘園領主にも払わなきゃいけないし、新しい勢力の守護地頭にも年貢を要求されるというような、いわば税金の二重取りのような状況になってたわけです。従って農民の生活は非常に苦しいんです。その時に守護地頭に逆らわず年貢はキチンと払えといわれたら、農民はやれないわけです。まあ蓮如さんはそういうことを言っておるんです。やっぱり蓮如が世間通途と言ったのは、おそらく九割も九割九分も譲る事の出来ない事を譲れということで世間通途と言われたのでないかと私は思っていますね。

確かに私は、蓮如という人は苦労しておるなあという思いはありますよ。宗教者として本願寺を大きくしようとした、権力というものが襲いかかってきて苦労しただろうということはよくわかります。

また蓮如は貧乏のどん底状態で少年時代を過ごしていますから、何とかこの親鸞の浄土真宗を世間に広めたいという、この一念を頭に一途に頑張ったわけでしょう。ほんまかウソかわからないが、おかあさんが「本願寺を再興しなさい」と言い残して去っていったというような話しもありますが、蓮如という人は生涯それを支えにしてそれを願ったという一途なところには共鳴できる所がありますよ。特に広島県の場合は安芸門徒というぐらいですからね、それぐらいはこの広島の地にあって妥協しても良いんではないかと思います。そこは妥協をして実は蓮如の問題の核心を提起しようと言うのが私の立場であります。

それで福嶋先生からも色々お話があったわけですが、蓮如のいわゆる御文章ですね、御文章を読んで、

いかにも葬式仏教と言うか、ああいうことばっかり言ってますよね。あの白骨の御文章の中から現世をどう生きるかという事の示唆は、先ほど福嶋先生が言われたように永遠の楽果を受けるために場合によったら現世を粗末にしてもかまわないということになっています。この世の楽しみはと言ったら僅か五十年、百年でないか、極楽浄土に往生することは永遠の事よと。

そうすると、そういうことを考えたらですね。今は年貢を払え、今生きている間はしんどいかもわからないが、あの世で極楽に行けばいいということと相通じておるんです。一貫性がある。だから私は蓮如さんという人を誉めるわけにはいかないんです。

心情的にはですね、おかあさんが備後の鞆の人ではないかという話もあるんでね、身近に感じたいという気持ちはあるんです。出来れば蓮如という人が名実ともに中興の祖であるということをやはり望みますけれども、しかしそうはいかないなぁと言うのが私の気持ちなのであります。

また蓮如の教えで言えば、「深く信心を内に蓄えて外にそれを出すな」と言っておられるわけです。これが王法為本という一つの姿で、あまり浄土真宗の事を言ったら弾圧を受けるから言うなということでしょうが、信心はそんなもんではないでしょう。私は宗教者というものは信心を獲たのに顔にでないなどというのはおかしいと思いますね。

（一向一揆の評価を巡って）

話しを少し進めますが、蓮如の時代には土一揆などが頻繁に起こる時代であって、一向一揆が起こってきますわね。特に加賀の一向一揆は、あそこの守護を倒して百年間、今ほどの完全な自治制ではないけれども、自治的な形態があそこまで続いたわけです。歴史がそこまで進んできていたわけです。ところがそのことを蓮如は言語道断な事だと批判するわけです。歴史の仮説をたてて、例えばもしも歴史の事実とは異なり、もしもこうであったら違った状況であっただろうと言うのは、あまり言うべき事ではないですけど、私はこの部落解放運動を進めて、市民的権利の問題ということを柱に、差別解放に取り組んでいますと頭の中でフッと思うんです。蓮如さんが本当に内心に信心を持っているのであれば、あのように一揆を批判しなかったのではないか、もしも農民の一揆の側に立っておられて蓮如さんが発言

していたらひょっとしたら歴史の展開が違っていたのではないかとまあ思うわけです。

時代が少し後になりますが、一向一揆は織田信長と石山本願寺で戦うわけです。毛利などの大名も、自分の権力を確立するためでしょうけれども協力するわけです。でも戦いの主力は農民たちです。農民たちは地方でも、そして石山本願寺でも大いに戦った。そして十年を越える歳月の後に天皇を間に立てて和解するわけですが、実質的には本願寺が負けたわけです。ただもう少し蓮如という人が、身の危険を冒してでも一揆の側に賛成する言葉を残していたら、もっと浄土真宗の門徒は石山本願寺の戦いにおいて、まだまだ私は厳しい戦いをしておったのではないかと思うわけです。そうすると、ひょっとしたらあそこで日本の中世封建社会というものが挫折をして、日本の歴史の展開というものはまだまだ立派なものになっておるのではないかと、私は思ってみたりするんです。

福嶋　一向一揆の評価についてですが、いま小森さんは一向一揆に高い評価を与えられました。

私も例えば山城の国一揆をはじめとするさまざまな国一揆への評価を同じように、いわば歴史の進展を示すものとして評価するにやぶさかではないのですが、これまでいろいろ申しのべてきたような問題意識から、一歩踏み込んで見るとき、高い評価はとても与えられないと言わざるをえません。一揆が勝利した「百姓の持ちたる国」が成立し、それは約百年続きますが、その内側で何が生み出されたのでしょうか。そこに現出した社会はいかなるものであったのか、あるいはいかなる社会を構想し、志向したのかといったことに注意を払いたいのです。そうすると、そこに見えてくるのは「世間通途」ということです。死後を安堵されて、世間通途のありようを果敢に生きる者が一揆で立ち上がり、権力を奪取しても、現出した事態は文字通り「世間通途」のものであったし、それ以外ではありえなかったわけです。ですから一向一揆に親鸞の宗教的－社会的立場を見いだすことはできない、親鸞の思想に繋がる思想が一揆として現れたとするのは、私は誤りだと思います。一向一揆は親鸞ではなく蓮如の立場につながっているのではないでしょうか。この世は一旦の浮世、あっという間におわってしまうようなもの、大切なのは永遠の世界、来世だとする蓮如の立場は、それ故にこの世のすべてを無価値とすることにおい

ては、ある意味では徹底的な相対化をもたらします。時として「王法為本」を説くことをためらわない蓮如の立場は、期せずして一揆を生み出したのです。それは果敢な世間通途の実践に外なりませんが、それだけのことです。一揆はやがて解体されますが、それを通じて歴史に何を残したのでしょうか。闘いに敗れても人間の平等な尊厳を伝統化したかといえば、その可能性をはらんでいなかったのです。

とはいえ、教団は五百年法要を大々的にやろうとしています。私ごときが何を言おうと何の意味もないのですが、それを承知でせめて思うことは、このたびの法要を機に、蓮如を真宗八百年の歴史の中にきちっと位置づけなくてはならないということです。真宗の歴史の中で蓮如の位置は巨大です。ならばいつまでも生き延びさせず、きちんと歴史の殿堂におさめることです。教団は一向一揆を真宗の宗教的・社会的立場とのかかわりでどう評価するのか、このことは是非はっきりさせるべきでしょう。無理を承知でそういうことを期待するのですが。それが出来るのならば盛大な法要も容認できる気がします。教団人でもあるある高名な真宗史家が、教団再興への最後のチャンス、蓮如をほめ上げていたのではそれも望みえないだろうとつぶやいておられたのが心に残ります。

小森　確かに蓮如という人がですね、一向一揆を起こしたようすをみて、「でたらめではないか、めちゃくちゃではないか」という面はあったと思います。でもその事を理由として一向一揆に対して圧力をかけた蓮如の行動は正当だったという事は言えないと思うんです。これが一つの視点。

それから一向一揆の起こる原動力といいますか、それは蓮如の教えというより親鸞の教えではないかと思います。特に親鸞の現生不退の教え、生きている間が大事だという、もっとこれは複雑な中身を持っておるんですけどね。私は親鸞が導いた権力に対しての価値を相対化する考え方、「主上臣下法に背き義に違し」というように。こういう宗教的な教えが一向一揆には大きく働いていると思います。石山本願寺であれだけの戦いをやるという事は私は親鸞以後の始め頃の純粋な浄土真宗のものの考え方が、浄土真宗の中に生きておった姿だと思っています。

それからもう一つ申し上げますと、蓮如を擁護される人に言ってみたいと思うんですけど、蓮如が吉

崎に御坊を建てられたあの時のですね、蓮如と権力との癒着のです。蓮如は吉崎に進出するにあたって、朝倉氏というその土地の権力者と今でいえば規制緩和みたいな折衝をしていますわね。それとその吉崎の土地というものは、奈良の興福寺・大乗院の経覚という人が隠居場として持っておった土地です。その隠居場として持っておった土地に蓮如が何の条件も付けずにあそこへ寺を建てさせてもらったとしても、それはどっちかと言うと年貢を取り立てる者の味方にならざるを得ないのじゃあないですかね。しかし、一説に寄るとですね、やっぱり興福寺の計画に乗っておって、おそらく「私(蓮如)が吉崎へ行ったら、年貢は何とかします」、と言っていたのではないかと。そうすると年貢を払え、払えと言っても無理もないわけです。

それからまた蓮如もそうですが、本願寺そのものが、かなり荘園を持つ者と縁をむすんで、年貢を取り立てるような立場と係累ですから、一門から言ったら「年貢を払え」と言う立場になるのは当然の経緯があると思うんです。そこらをねやっぱり蓮如を擁護される人はよく分析をされて蓮如のことを評価しないとこの問題は前に進まない、ここはこの問題における決着をつける非常に重要なポイントになっておるのではないかと思います。

福嶋　もう一度一向一揆に戻るんですが、あれだけの行動、教団で言えばその存亡をかけて踏みだし、門徒で言えば自らの死をかけて参加するのですから、そこには真宗信仰にもとずく正当化の理論ずけがあってしかるべきだと思うのですがそれがまるでないことの意味を考えざるをえません。その理論ずけが後になって間違っていたということであっても、ギリギリのところで理論ずけなければ、闘争は結局のところ単純に勝利か敗北かの結果しかないわけです。たいていの場合こういうときの理論ずけというものは、後になれば間違っていたということになるのでしょうが。その間違いの自覚は重要だと思うわけです。

例えば武器を持って実力で闘うのは真宗の信仰にとって許されるのか否か。教団の防衛という限りにおいて許されるのか、それでも許されないのだとかいった具合にです。それがまるでないのですから、このことの意味は考えられなくてはならないと思います。そこには、信仰にもとずく理論的な、あるいは思想的な営みというものを成立せしめない信仰の

特質が浮かびあがってくるのではないでしょうか。

「後生の一大事」を解決することのみが信心の問題とされ、この世、今生のことはそれと原理的にかかわらない蓮如の真宗からすれば、武器をとって殺生しようが、どうしようが、それはその場で適当に判断すればいいということになるのでしょうから、思想的には徹底的に不毛な宗教と言わざるを得ないのではないかと思います。そこでは過ちを犯すことさえないのです。

ヨーロッパの近世、宗教改革の後、約二世紀にわたって新旧両派による激しい宗教戦争が繰り広げられたことはよく知られているのですが、そこでは神学の営みとして信仰を圧迫する国家権力に対して、信仰者の抵抗はどこまで許されるのかといったことが問題にされます。真宗では、仏教のすべての宗派がそうなるのですが、明治維新期の廃仏状況下でも、アジア・太平洋戦争下でも、そういった議論は起こらないのです。なるほど「真俗二諦」が打ち出され、またその極限形態とも言うべき「戦時教学」が編み出されますが、それらはいずれも現出した状況といかに折り合いをつけるかといったきわめて政治主義的な対応にすぎません。ですから、例えば敗戦後、それまでの教団の行動に対する反省も責任意識も出てきませんでした。すべては状況のせいにされて終わってしまいます。あの戦争に決定的に加担していながら、戦後は平然と今度は「平和でなくっちゃ」と言い、「真の平和は念仏によって」と言ってのけるわけです。これは部落差別についても言えることですが、私たちはこうした真宗の「底なし沼」を放置しておくわけにはいかないのではないでしょうか。

小森　私は蓮如の「後生の一大事」ということは、最初は「今生が一番大切だよ」ということを言っているのかと思っていたんですが、よく読んでいくと、「これはちょっと親鸞とは違うな」と思ったわけです。蓮如さんの場合は死んでからのことに重点がかかって、ずいぶんずれ込んでおるんですね。仏教の本当の教えから言えばこうなんです、しかしちょっとずれ込んできたんです、とぐらいは言わないとダメですね。中興の祖というぐらいならよけい蓮如の言った事にもキチッと批判を加えていくというような、そういう態度を取らないと、この仏教というものからも、真宗ということからも人々はだんだん離れてしまうとこう思うんです。

親鸞聖人にだって問題がないわけじゃあありませ

ん。御和讃の中には「旃陀羅」というような言葉を否定的に使ったという問題もあるわけです。しかし問題点は指摘するけれども、それと同時に親鸞の良い所がいっぱいあるわけですよね。そこらを調べていくことに大きな意味があるわけです。ただし蓮如の場合は実は逆だと思いますけどね。蓮如はよいところというのはあまり見あたらないけれども、悪いところはいっぱいあります。例えばあまり議論できませんでしたけれども、「女は男にまさりて罪深きものなり」というような、「どんな仏さんでもサジを投げたのに阿弥陀さんだけが救ってくれるのだから有難いと思え」というような所謂、「五障三従」という問題がありますわね。こうした問題についてもやっぱり批判する所はキッチリ批判しないと、仏教の本当の道筋が分かってきませんよ。宗教の本当の意味における人間の生活の復権という事にはなりません。何が何でも偉いと言って誉めようとすればするほどダメになると私は思います。

福嶋　少しだけ付け加えますと、親鸞であっても差別的表現は見られますし、後の真宗教団とまではいかないとしても、蓮如にも部分的には評価しうるところがあるかもしれません。中世という時代を生きたのですから、当然歴史的な制約もそこにはあるわけで、それらを今日の水準から断罪するのはどうかと思います。いろいろあっても、基本的にどうだったかが問題で、基本的立場が差別を容認したのか、基本的立場はそうではないにもかかわらず、そういった部分を含でいるのか、注意深く判断されなくてはならないと思います。

司会　それではまだまだ話し足りない部分がたくさんある訳でございますけれど、一応時間ですので終わりにさせていただきます。お二人の先生には長時間まことにありがとうございました。